

突風及び降ひょうに対する農作物等の技術対策について

令和元年7月4日
農林水産部担い手支援課

千葉県では、4日朝から4日夕方にかけて、雷を伴った激しい雨が降り、大雨となる所がある見込みです。大雨による土砂災害や低い土地の浸水、河川の増水、落雷や竜巻などの激しい突風、降ひょうに注意が必要です。

については、次の事項を参考に、技術対策を実施してください。

1 果樹（ナシ）

<事前対策>

多目的防災網を点検し、被害の発生を未然に防止する。

<事後対策>

(1) 薬剤散布

ア 葉や果実が損傷している場合

雨が降る前に、防除暦を参考にして、被害後2～3日経過時点で農薬を散布する。なお、「幸水」では収穫が近づいているため、農薬の収穫前使用日数に注意すること。

イ 枝や幹に被害がある場合

直ちにトップジンMペースト原液を枝や幹の損傷部に塗布する。塗布が遅れると傷の回復が悪く、枯れ込みが多くなる。被害面積が大きい場合は、被害程度の大きい園や「幸水」園を優先する。

※折れた枝は切り返してから、塗布する。

(2) 棚の保護

降ひょう量が多く、多目的防災網に積もった場合には、多目的防災網を切るなどして、棚を保護する。

2 施設共通

<事後対策>

(1) 突風や降ひょうによって施設が破損した場合は、ビニールの損傷箇所を早急に修理する。

(2) 施設内への降雨により傷口から病気の侵入のおそれがあるときには、殺菌剤の散布により病害の発生を防止する。また、液肥の葉面散布等により生育の回復に努める。

3 野菜

<事後対策>

(1) すいか・メロン

突風や降ひょうによって生じた傷口から病害感染のおそれがあるので、薬剤を散布する。特に、今後の天候によって以下の病害の発生が懸念されるので注意する(カッコ内は病原菌の生育適温)。

炭疽病(22~28℃)、疫病(28~30℃)、べと病(20~25℃)、つる割病(24℃)、褐色腐敗病(28~30℃)、菌核病(18~20℃)

(2) 食用とうもろこし

被害が軽度のものについては、葉面散布の実施や即効性の肥料を施用して生育の維持・再生を図る。

(3) ねぎ類

葉の傷口から病害の侵入・発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。また、株養成期の畑は、追肥等の管理を適期に行う。

(4) 露地野菜一般(ショウガ、サトイモ、イチゴ苗など)

突風や降ひょうによって生じた傷口から病害感染のおそれがあるので薬剤を散布する。草勢の回復を図るため、草姿に回復の兆しが見られはじめたら、葉面散布剤や速効性の肥料を散布する。

※農薬の使用に際しては、ラベルの表示をよく確認するとともに、最新の農薬使用基準を守って使用してください。